

## 令和5年度 道産小麦消費地流通実態調査研修の経過について

弊会では、4年ぶりとなる道産小麦消費地流通実態調査研修を5月29日（月）から31日（水）に実施しました。本研修は、実需の道産小麦の評価、実需から求められる小麦品質を把握するとともに府県の優良な生産事例を調査し、道産小麦の安定生産、品質改善に向けた取組を進めることを目的としています。

- 1 調査時期 令和5年5月29～31日
- 2 参加者 北海道農政部生産振興局技術普及課（農研本部駐在） 千葉主査  
道総研 北見農業試験場 研修部麦類畑作グループ 其田主査  
〃 村山研究職員  
北海道農産物集荷協同組合 石井課長  
北見地区米麦改良協会事務局 加藤職員  
ホクレン農業協同組合連合会 農総研営農支援センター 池口特任技監  
〃 農総研食品検査分析センター 高松職員  
事務局 一般社団法人 北海道農産協会 米麦部 北沢次長、三宅技監

### 3 訪問先

- (1)ホクレン名古屋支店（対応：農産課 寺栖氏）  
中京地区における豆類の販売動向について情報交換を実施
- (2)三重県桑名地域農業改良普及センター（対応：普及1課 東川主任、水谷技師）  
伊勢うどん用に特化した小麦品種「あやひかり」等の生産状況について
- (3)株式会社 さいとうらいず 齊藤來洲（対応：齊藤昇次 代表取締役、齊藤啓太 取締役、齊藤幸美氏）  
令和4年度 全国麦作共励会【農家の部】で農林水産大臣賞を受賞者  
経営概要と小麦栽培の技術的な特色について
- (4)平和製粉株式会社（対応：樋口社長、伊藤品質管理課課長、製造部 森脇氏  
JA全農みえ 米麦部米穀課 足立氏）  
平和製粉株式会社における製粉施設の概要と小麦粉生産状況、道産小麦の評価と求められる品質等についての意見交換

### 4 研修報告

本研修の概要につきましては、北海道農政部生産振興局技術普及課 千葉主査に「あやひかり」の栽培普及の経過と株式会社齊藤來洲の経営状況、道総研北見農業試験場研究部麦類畑作グループ 其田主査には、平和製粉株式会社の取組について作成していただきましたので、ここにその内容を掲載いたします。

### 5 謝辞

本研修にあたって、お忙しいなか対応いただいた、ホクレン名古屋支店様、三重県桑名農政事務所 桑名地域農業改良普及センター様、株式会社 齊藤來洲様、平和製粉株式会社様より感謝を申し上げます。

北海道農産協会米麦部

## 「三重県における小麦生産の概要と株式会社齊藤來洲の経営概要について」

北海道農政部生産振興局技術普及課農業研究本部駐在  
主査（普及指導） 千葉 健太郎

### 1 三重県における小麦生産の概要（三重県員弁郡東員町、令和5年5月30日）

三重北農業協同組合三和支店において、三重県桑名地域農業改良普及センター普及1課 東川主任、水谷技師より三重県における小麦生産状況について伺った（写真1）。

桑名地域農業改良普及センターは愛知県境に近い桑名市、いなべ市、東員町、木曾岬町を管轄している。管内耕地面積6,269haのうち水田5,271haと水田農業が主体の地域である。

三重県における小麦栽培面積（令和元年産）は6,300haであり、品種別では「あやひかり」4,500ha、「さとのそら」400ha、「タマイズミ」500ha、「ニシノカオリ」900haとなっている（面積はいずれも推計値）。平成13年産までは全て「農林61号」が栽培されており、主に麺用ブレンドとして用いられていた。しかし、同品種の年間需要量約8,000tに対して平成12年産の生産量は1万tを超え、需給に顕著なミスマッチが生じていた。

需給ミスマッチ改善に向け、平成14年9月に実需者、団体、行政で構成される麦作振興対策会議を設置して密接な情報交換を行った。その結果、県特産品の“伊勢うどん”への適性が高い「あやひかり」等の新品種へ転換を進めることとなった。

品種転換に向け、平成13～14年に県内22カ所で新品種実証ほを設置し、併せて適期は種、適正な窒素追肥、湿害対策など安定生産技術の普及を進めた。

三重県における小麦栽培では湿害が多い。その対策として、額縁明きょ設置、チゼルプラウ耕の普及に取り組んだ。は種前のチゼルプラウ耕はロータリー耕のみの場合と比べて10%以上増収した事例もあり、平成20年代中頃から普及が進んでいる。土壌の低pH対策として、県南部で盛んなカキの養殖から生じるカキ殻粉末の活用にも取り組んでいる。

また、県内の小麦二次加工業者への意向調査（三重県産小麦利用のための課題把握）、農業高校と連携したスーパーマーケットでのPR活動等に取り組んだ結果、「あやひかり」を使用した伊勢うどんの製造販売に取り組むメーカーが増え、需要拡大につながった（写真2）。



写真1 普及センターによる説明の様子



写真2 三重県産小麦を使用した商品例

### 2 株式会社齊藤來洲<sup>らいす</sup> 小麦ほ場視察（三重県員弁郡東員町、令和5年5月30日）

株式会社齊藤來洲は令和4年度全国麦作共励会【農家の部】で農林水産大臣賞を受賞した農場である。代表取締役 齋藤昇次氏、取締役 齋藤啓太氏、齋藤幸美氏より農場の概要について伺い、収穫を間近に控えた同社の小麦ほ場を視察した（写真3）。

同社の令和元年産～3年産小麦平均反収は456kg/10aであり、県平均343kg/10aと比較して

非常に高い水準を維持している。

経営面積は約 84ha（水稲 26ha、水稲受託作業 3ha、小麦 27ha、大豆 28ha）であり、水稲－小麦－大豆の二年三作のブロックローテーションを確立している（図 1）。

小麦の品種は全て「あやひかり」であり、JA を通じて県内実需者に納めている。

小麦栽培の技術的な特徴としては、①徹底した排水対策（スタブルカルチによる心土破碎（写真 4）、額縁明きょ・ほ場内明きょ設置、バーチカルハローによる初期生育確保を意識したは種床整地） ②土づくり・施肥（土壌分析に基づく土壌改良資材施用、後期重点型施肥の実践、緩効性肥料の施用） ③ドローンによる赤かび病適期防除 等があげられる。特に、ブロックローテーションを確立しているほ場は栽培年度によって排水性不良ほ場も多く含まれるため、排水対策については労を惜しまず特に注力して取り組んでいる。また、地域内では 10 月下旬～11 月上旬のは種事例が多い中、当社では小麦の過繁茂を防ぐため適期適量は種（視察したほ場は令和 4 年 11 月 20 日に 8 kg/10a は種）を実践している。さらに、令和 5 年産からは冬季の降雪による追肥窒素流亡を防ぐため、追肥（1 回目）の総施肥量を変えず 2 回分施肥体系に変更するなど、新たな工夫を加えていた。これらの取り組みによって、令和 5 年産は穂数を確保しつつ倒伏も少なく手応えを感じている、とのことであった。

当社の小麦ほ場は生育の揃いの良さが印象的であった（写真 5，6）。は種作業も含めた作業精度の高さや、普及センターの技術提案等をもとに基本技術を励行しつつ独自の創意工夫も加え、安定確収を実現されていると感じた。なお、技術内容の詳細は農林水産省ホームページ（令和 4 年度全国麦作共励会表彰事例）で公開されているので参照されたい。

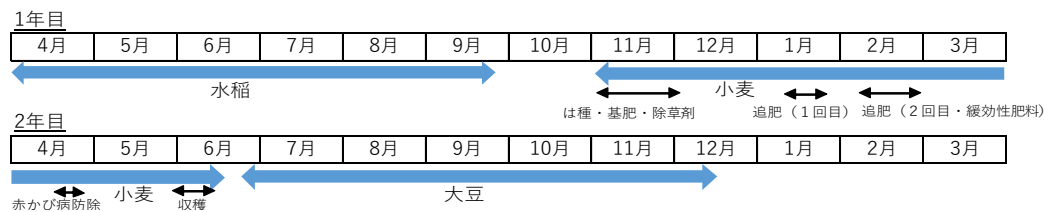


図 1 ブロックローテーションおよび令和 4 年産小麦作業時期の概要



写真 3 斎藤啓太取締役より農場概要説明



写真 4 心土破碎に用いるスタブルカルチ



写真 5 「あやひかり」栽培ほ場



写真 6 「あやひかり」の穂



## 「平和製粉株式会社の施設概要と道産小麦の評価について」

北海道立総合研究機構 北見農業試験場研究部麦類畑作グループ  
主査（麦類） 其田 達也

三重県津市に本社工場のある平和製粉株式会社を訪問し、同社の概況や道産小麦についてなどの意見交換を行った。対応していただいたのは代表取締役社長の樋口氏、品質管理課長の伊藤氏、製造部の森脇氏である。

### 1 工場の概要

製粉工場は最近新設し、基本的には新工場のライン1本で製粉を実施している。現在の小麦の使用量は道産小麦が一番多く1万トン、次いで三重県産小麦の6千トンで、年間合計1万7千トン～1万8千トン程度、主に国産小麦で10数種類の品種を製粉している。将来的には年間の取扱量を2万トンに拡大したい意向があるとのこと。

### 2 道産小麦、国産小麦について

道産小麦については「きたほなみ」を始め北海道で作付けされている優良品種のほとんどを取り扱っている。道産も含めた国産小麦については、品質の良い小麦品種が出た10年ほど前から、それまでの国産小麦よりも品質が良くなったことから取扱量を増やし、前述の通り現在は国産小麦の商品がほとんどである。

「きたほなみ」の次に取り扱い始めた「春よ恋」、「ゆめちから」は販売が軌道に乗ってきており、風味に特徴のある「キタノカオリ」も堅調な需要がある。近年「キタノカオリ」の生産量が減少しており、

その穴埋めに他品種とブレンドした小麦粉商品を作っているが、「キタノカオリ」100%の商品の方が良いと考えているため、「キタノカオリ」の必要数量安定的に供給して欲しいとのこと。

「はるきらり」は最近取り扱い始めたところで、現在販路開拓中であるとのこと。

また、2020年に優良品種になった「北見95号」にも非常に興味があるとのことだった。

道産小麦に次いで取扱量の多い三重県産小麦は主に「あやひかり」を取り扱っている。「あやひかり」の小麦粉は「伊勢うどん」などに使用されており、地産地消に貢献している。



写真1 平和製粉株式会社の製粉工場



写真2 意見交換の様子(奥右 樋口社長)



写真3 「きたほなみ」の小麦粉製品(左)  
と各種小麦粉製品(右)

### 3 おわりに

今回の意見交換では、道産小麦の評価や利用の実際を直接見聞きすることができ、非常に有意義な調査でした。これからも道産小麦を使用していただくためには、品質が良く安定した供給が可能な農業特性を持つ品種の開発が重要であることを改めて感じました。